

# わが心の自叙伝

## 菅原洋一

.....▷12

1962(昭和37)年夏、駆け落ちした私と女房の新婚生活は、東京・練馬の六畳一間のアパートから始まった。風呂もなければトイレもない。部屋にあるのは彼女の鏡台とみかん箱に紙を貼ったちゃぶ台。そして入り口そばにある流し台にこんろがひとつ。

当時私は、藤沢風子さんの前座歌手だった早川真平とオルケスタ・ティピカ東京を辞めフリーになっていた。そのため決まった給金が入らなくなり、生活は不安定となった。実に貧しかったのである。

新宿の店「ラ・セーヌ」には毎日出演していたが、それだけでは足りず、近所の子供にピアノなんかも教えていた。でも夢だけをサカナに、わくわくドキドキする日々を送っていた。まさに「青春謳歌」「若いって素晴らしい」といってころだ

### 結婚パーティー

ろう。友人たちにもよく世話になった。金がなくなると、何かをぶらさげて家に寄つてくれた。そういえば結婚パーティーも国立音大時代の親友が中心になつて企画してくれた。

もちろん両家大反対の末だから結婚式などは挙げていない。それがかわいそうだと思つてくれたのだろう。忘れもしない。駆け落ちしてから4カ月ほどたった11月17日、銀座の中小企業会館という場所で会費700円のささやかなパーティーを開いてくれたのだ。



結婚パーティーで。妻アケミさん(中央右)と筆者

私の列席者はタンゴや店の人たち、女房側は20歳から1年間勤めていた銀座「和光」の職場の仲間のみ。でも本当にうれしかったことを今でも記憶している。

あれからもう60年近くの月日がたったのか。こうなったら私は歌で、彼女を幸せにしなければならぬ。そう心に誓ったものだ。そのため、タンゴだけではなくラテンやシャンソン、カンツォーネ、映画音楽と、あらゆる歌を歌い始めた。その時期はそういった音楽喫茶がたくさん存在していたのである。

これは北村維章とシンフォニック・タンゴオーケストラが演奏、ピシヨップ節子さんが歌うというアルバムだった。北村さ

んは、以前私が在籍していた早川真平さんとともに戦後のタンゴブームをけん引した人である。さらにピシヨップさんといえは、名曲「詩人の魂」を自ら訳詞して歌いヒットさせたシャンソン歌手として高名だった。そこに私がゲストシンガーとして3曲吹き込むというのだ。

駆け落ち婚から1年、待ちに待ったレコード歌手への第一歩である。レコーディングした曲は「黒き汝が瞳」、そして後々「紅白歌合戦」で歌うことになる「奥様お手をどうぞ」と「小雨降る径」という、日本でもなじみ深いタンゴの名作だ。

しかし期待に反してこのアルバムはさして話題にはならなかった。だが私には大きな意味を持つことになるのだ。レコードを聞いた別のディレクターが、私に歌謡曲の道へと誘うことになるのである。(すがわら・よういち||歌手)

# 会費700円、音大の仲間が企画